

## ミクロネシア連邦チューク環礁における有用植物および食事に関する調査

山本宗立<sup>○</sup> (鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)・川西基博

(鹿児島大学教育学部)・西村 知 (鹿児島大学法文学部)

ミクロネシア連邦では 1950 年代までいわゆる「伝統的」な食生活 (パンノキや芋類、バナナ、海産物など) が営まれていたが (Murai, 1954)、1960 年代にアメリカ合衆国農務省が補助給食プログラムを開始して以降、「近代的」な食事 (米や小麦粉、砂糖、脂肪分に富む食品、輸入加工食品など) に置き換わっていったとされる (Englberger *et al.*, 2003)。しかし、食事が「近代化」したとはいうものの、それを裏付ける詳細なデータはこれまでに発表されていない。

そこでミクロネシア連邦チューク州ピス島において有用植物および食事に関する調査をおこなった。2012 年 6 月・9 月に食事調査表の記入を三世帯 (A・B・C) に依頼し、2012 年 8 月・2013 年 1 月に調査表を回収した。各項目の頻度を食事に出てきた回数/食事の総回数 (朝・昼・晩×日数) で示した。また、2012 年 8 月に居住地域に分布する木本植物、作物、草地群落などの植物要素の位置を記録し植生図を作成した。土地の区画ごとに各植物の有無を求め出現頻度を示した。

パンノキ (16)、サトイモ (3)、*Xanthosoma sagittifolium* (2)、*Cyrtosperma merkusii* (5)、サツマイモ (3)、キャッサバ、インドクワズイモ (3)、タシロイモ、バナナ (13)、ココヤシ (5)、*Pandanus* spp. (2)、カボチャ類、トウガラシ類 (3)、トウガン、*Ocimum* sp.、サキシマハマボウ、*Cnidioscolus chayamansa*、*Alternanthera sissoo*、パパイヤ、マンゴー、*Citrus* spp. (2)、*Syzygium* spp. (2)、バンジロウ、*Crateva speciosa* が栽培されていた (括弧内の数字は栽培品種数を示す)。パンノキ、バナナ、ココヤシはほぼすべての区画に分布し、居住域における出現頻度は 90% 以上であった。*Syzygium* spp. (47.7%) や *Citrus* spp. (43.2%) も比較的出現頻度が高く、次いで *Pandanus* spp. (27.3%)、パパイヤ (25.0%)、*Crateva speciosa* (15.9%) であった。その他の作物の出現頻度は 10% 以下であった。

大部分のパンノキの収穫期が 6 月~8 月であるため、3 世帯とも 7・8 月は高頻度でパンノキを利用していた。パンノキの果実は保存食にもされるため、9・10 月に保存食の利用が多かった。パンノキの果実をあまり収穫できない 11・12 月は *Cyrtosperma merkusii* やバナナの利用頻度が高くなっていた。サトイモや *Xanthosoma sagittifolium*、キャッサバの利用頻度は低かった。インドクワズイモや *Tacca leontopetaloides* は過去には食したものの、現在は利用していなかった。輸入品である米は高頻度で利用されていた (A : 98.4%、B : 93.3%、C : 66.9%、6 カ月平均、以下同様)。

A 世帯の野菜の利用頻度が B・C 世帯に比べて高かったが (A : 47.5%、B : 0.7%、C : 20.0%)、島外で購入したタマネギ・ニンニクを少量利用する例が多かった。島内産の野菜としては、サキシマハマボウの葉やかぼちゃの葉、トウガン、バナナの花蕾等が利用されていた。ミクロネシア連邦では糖尿病や高血圧、心臓疾患などの健康問題を解決するために、野菜類の導入が奨励されてきた (e.g., Englberger *et al.*, 2009)。しかし、実際には野菜をそれほど利用していないことがわかった。

海産物の利用頻度は 6 カ月間で大きな変化はなく、鮮魚 (A : 72.5%、B : 74.7%、C : 67.1%)、干物 (A : 38.3%、B : 31.3%、C : 52.4%)、蛸や貝類、海亀、蟹などのその他海産物 (A : 45.9%、B : 21.7%、C : 12.7%) であった。現在においても環礁内で獲得できる海産物を高頻度で利用していることが明らかとなった。

輸入食品であるインスタント麺 (A : 61.3%、B : 41.3%、C : 51.6%) は世帯に関係なく中程度で利用されていたが、魚の缶詰 (A : 47.5%、B : 27.7%、C : 33.6%)、精肉 (A : 33.6%、B : 30.1%、C : 15.8%)、肉の缶詰 (A : 29.5%、B : 5.6%、C : 10.2%) の利用頻度は世帯によってばらつきがあり、現金収入の違いに起因すると考えられた。